第　39　号

県中教研 社会部会だより

発 行 日　令和6年3月
発 行 所　富山市千歳町1－5－1
富山県中学校教育研究会
編集責任者　藤田　栄子
題　　字　金山　泰仁　先生

主体的な学びの実現

指導主事　橘　　恭幸

学習指導要領社会科の目標には､社会的な見方･考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して資質・能力を育成すると示されている。また、課題を追究したり解決したりする活動では、単元など内容のまとまりを見通した学習課題（単元を貫く問い）を設定し、課題解決の見通しをもって他者と協働的に追究し、結果をまとめ、自分の学びを振り返ったり、新たな問いを見いだしたりすることが求められている。

本年度、研究大会の全ての授業で、単元を貫く問いが設定され、研究主題にある「主体的に追究する生徒を育てる」ことを目指した授業実践が行われた。「アフリカ州」の授業では、「アフリカ州の国家はどのような課題を抱え、解決に向けてどのような取組をしているのだろうか」という単元を貫く問いが設定され、生徒が貧困の要因を歴史や経済の側面、先進国と途上国の立場等、多面的･多角的な視点で資料を読み取り、考えを深める学習が構想されていた。本時では、ダイヤモンドを多く産出しているにもかかわらず、貧困にあえぐ国民の状況の提示により、生徒の思考のズレを生み出し、「資源が豊富なアフリカ州の国々が貧困から脱却できないのはなぜか」という新たな問いへの課題意識を高めていた。生徒は見通しをもちながら、気候や経済、教育水準等、複数の要因から考察し、自他の考えを比較したり、共通点や相違点を確認したりしながら考えを導くなど、主体的な学びの姿がみられた。学習過程の中で、新たな問いや解決の方向性を見いだすための工夫の大切さを感じた。

主体的な学びの実現には、生徒が見通しをもつだけでなく、学習したことを振り返り、自分たちの学びを自覚することが重要である。何を学び、どのように成長したのか、何が分からなかったのか、新たにどのような疑問が生まれたかなどの視点を示し、次の学習への意欲や問い続ける姿勢が育まれる振り返りの場の充実を期待する。

（西部教育事務所）

PDS のトライアングルを意識して

部長　藤田　栄子

本研究会は、主題の解明を図るために、研究主題と研究内容（P)、授業研究と研究発表（D)、学力調査等（S）のトライアングルの関係を重視する方針で研究を推進しています。中教研の会員一人一人がこのトライアングルに関わり、共に研究を推進していく仲間であることを、今年度の活動を通して私自身強く実感いたしました。

授業研究（D）では、研究主題（P）に迫るための試行錯誤がありました。第67回研究大会が４地区で開催され、特に、新川・砺波地区では、授業力向上アドバイザー・兵庫教育大学名誉教授の米田豊先生の指導の下、研究主題（P）を解明するための授業研究（D）になっているかどうかについて、常に意識しながらの授業づくりとなりました。各郡市での指導案検討会では、学校を超えて盛んに意見を交わしたり、ベテラン教員から若手教員へ助言や支援があったりと、互いに緊密な連携を取りながら実践的・組織的研究が推進されました。また、研究大会当日は、多くの会員が部会協議会において、研究主題と授業研究との関連について部員同士で意見を交わしたり、専門家の講演等を聞いたりして、理解を深める貴重な機会になりました。

学力調査（S）では、評価規準に基づく指導と評価の一体化を目指し、評価委員会が問題を作成しました。11月調査後はS ‐ P表を活用したり各学校からの意見を参考にしたりして分析を進め、指導計画や指導方法の改善に生かそうと努めています。

今年度も終盤を迎え、研究推進委員会にて来年度の研究主題（P）の作成が行われました。新しい研究主題が決定し、新年度の研究がまたスタートしようとしています。

PDSのトライアングルを支えている大切な一人であるということを、会員自身が意識しながら活動することで、研究活動の充実へとつながるのではないかと考えます。

（砺・般若中）

第 67 回 研 究

新　川　地　区　（魚・西部中）

（1）研究授業

永森勇希教諭が、１年地理的分野「世界の諸地域　北アメリカ州」の単元で「なぜアメリカ合衆国の農作物の価格は安いのか」という学習課題で授業を行った。

生徒は課題解決の手がかりとなる「適地適作」「大規模農業」「企業的農業」の３つの視点に関する資料や図を根拠にしてアメリカ合衆国の農作物が安くなる理由を考えた。その後、同じ視点について考えた生徒同士で話合い活動を行い、課題に対する考えを深めた。さらに、別の視点について考えた生徒と話し合うことで、多面的に考察し学習課題の解決に向かうことができた。学習の過程で穀物メジャー等、新出の内容に戸惑う生徒もいたが、知らない単語についてタブレットで調べたり、班内で情報を共有したりするなど、主体的に学習に取り組む姿が見られた。

大茂孝二郎指導主事（東部教育事務所）からは、単元全体の学習課題が適切に設定されていたこと、生徒が目的意識をもってジグソー学習に取り組んでいたことについて評価をいただいた。また、ジグソー学習では用語の内容を理解するだけでなく、なぜそれが農作物の安さにつながるのか、学習課題をもとに考えたり、疑問に感じことを話し合ったりしながら課題解決に取り組むことの大切さについて助言いただいた。

（2）授業力向上アドバイザーによる講演

兵庫教育大学名誉教授の米田豊先生より、「研究主題と社会科授業づくり」と題して講演をいただいた。研究主題の焦点化や評価の観点の明確化、実際の授業場面だけではなく、学習指導案作成の段階においての助言もいただいた。「生徒をど真ん中において考える」という言葉のとおり、教師は常に生徒のことを第一に考え教育活動を行うべきであると教えていただいた。

大坪　亮太（中・雄山中）

富　山　地　区　（富・速星中）

（1）研究授業

桶谷悠祐教諭が、１年地理的分野で「桶谷先生に新婚旅行先を提案するとしたら、ヨーロッパ州、オセアニア州どちらがよいか」という学習課題で授業を行った。生徒が既習事項を活用しながら討論する展開で、活発な意見交換が行われた。その後、３～５人のグループになり、提案内容について振り返り、自らの考えを深めた。

中村美穂教諭が、３年公民的分野で「若者も投票に行った方がよいのはなぜだろうか」という学習課題で授業を行った。有権者を年代別にし、生徒がそれぞれの年代の立場から政治に求めることをJamboardに書き込み、意見を集約した。その意見を基に、現在の選挙が抱える課題を確認し、国民の意見を政治に反映させるためには、政治参加が大切であることにつなげた。

（2）部会協議

部会協議では、橘恭幸指導主事（西部教育事務所）から、討論とディベートの違いを意識して議論することや生徒の考えの変化を確認することで新たな対話が生まれること、単元の構成は学びの連続を視野に入れながら工夫していく必要があること等、授業改善のポイントを助言いただいた。

福山暁雄指導主事（西部教育事務所）からは、グループ活動では課題解決に向けて自分の意見の説明だけでなく、根拠を基にした議論まで行うことが大切であることを、指導と評価の一体化と関連付けながら教えていただいた。

部会協議の後半は「研究主題を解明するための授業実践の発表」というテーマで山室中学校から発表があった。様々な思考ツールを活用して自らの思考を整理したり、授業内容を振り返ったりすることの有効性や、自由進度学習を取り入れながら個別最適な学びや協働的な学びの実現に向けた実践が紹介された。

問谷　文悟（富・大沢野中）

大 会 報 告

高　岡　地　区　（高・高綾中）

（1）研究授業

宮原翼教諭が、1年歴史的分野「古代国家の成立と東アジア」の単元で、「古代の日本とは、どのような時代だったのかをまとめよう」という学習課題で授業を行った。前時までに、国がまとまるための必要条件について各自でまとめ、本時では、自分の考えを発表し、課題に対するまとめを行った。PowerPointやOneNoteを活用し、グループや全体で共有することで、他者の考えと比較して疑問点を質問したり、自分の考えを見直したりする生徒の姿が見られた。

（2）部会協議

部会協議では、「生徒がICTを使いこなしており、日頃の指導の成果が出ていた」、「自分事として課題を考察し、自分の言葉でしっかりまとめることができていた」、「『為政者と農民』のように立場が違えば、国がまとまることの捉え方が異なるのではないか」等の意見があった。

福山暁雄指導主事（西部教育事務所）からは、中項目のまとめとして、古代までの日本を大観し見いだした観点は、今後の歴史や現代と比較して考察するのに有効であり、生徒が歴史を学ぶ意義を感じることにつながったとの評価をいただいた。また、評価規準を明確にしておくことや、主権者教育や小中接続を意識して授業づくりを行うことの大切さについて助言をいただいた。

後半は、「地域教材の開発と活用」と題して、勝興寺文化財保存・活用事業団の高田克宏専務理事を招き、国宝勝興寺の歴史的・文化的価値について講演をいただいた。民衆によって支えられてきた勝興寺の特質や、同じく国宝である瑞龍寺との比較等、地域の文化財に対する見識を深めることができ、今後教材として生かしていきたいと感じた。

高井健太郎（氷・西の杜学園）

砺　波　地　区　（砺・出町中）

（1）研究授業

山本章太教諭が、1年地理的分野で「アフリカ州には豊富な資源があるのに、なぜ貧困から抜け出せない国が多いのだろう」の学習課題のもと、既習事項を手がかりに、その要因を追究する授業を行った。生徒は、モノカルチャー経済や低い教育水準等、貧困の要因として考えたキーワードをタブレット上で共有し、意見交換を行った。また、印象に残ったキーワードを取り上げ、説明した後、より考えを練り上げる話合いの場の設定を工夫した。

（2）部会協議

部会協議では、指導案に「知識の構造図」が明記され、授業者は生徒に獲得してほしい知識を明確にして授業に臨んでいたことが評価された。また、学習課題の「資源が豊富なのに」の部分を重視し、考えの根拠となる資料を提示することで、より多面的で多角的な見方や考え方を促すことができたのではないか、板書の構造化を工夫すればよかったのではないかなどの意見が出された。

橘恭幸指導主事（西部教育事務所）からは、「社会的事象を主体的に追究するために、自分と異なるキーワードを選んだ他者と意見交換できる場を設定したことが効果的であった」「対話を促す学習活動を工夫することで、生徒が新たな視点に気付き、自分の考えを深めることにつながっていく」と助言をいただいた。

今回、授業力向上アドバイザーで兵庫教育大学名誉教授の米田豊先生に授業づくりの段階から大きく関わっていただいたことで、より研究主題の解明に迫る単元構成や授業展開ができた。今後の課題として、研究主題について、「教材開発と学習活動の工夫」と「指導と評価の一体化」の両方を一つの授業実践でねらうことは難しいとの指摘を受けた。社会科部会として、何をどの実践において解明していくのかを焦点化し、東西の研究部会での取組を連携していくことが、よりよい研究につながると考える。

福田志寿子（小・蟹谷中）

富山市中教研社会部会・活動報告

富山市中教研社会部会では、８月に現地見学と富山地区大会に向けた指導案検討を行った。現地見学は、富山地方裁判所と富山地方検察庁を訪問した。富山地方裁判所では、法廷内にある裁判官席や原告・被告席を見学した際に、実際に着席させていただくことができ、裁判を疑似体験から学ぶことができた。また、公判を記録するための録音録画機器やその役割も説明していただき、公正な裁判に向けた取組も知ることができた。富山地方検察庁では、証拠の審査が行われる審査室を見学し、慎重に公判を進めるための工夫を知ることができた。現地見学で学んだことは、今後の授業実践に生かす上で、大変参考になった。

富山地区大会の研究授業に向けた指導案検討では、部員が小グループに分かれて意見交換を行った。グループでの意見交換の際に、各自の意見をChromebookを活用して共有したことで、他のグループの部員による多様な視点からの意見も知ることができ、研究授業の授業者だけでなく、部員全員が授業づくりについて研修を深めることができた。

１月には、富山市郷土博物館館長の坂森幹浩氏を講師にお招きし、「『富山の薬売り』～売薬さんについて知ろう～」の演題で、講演をしていただいた。講演では､売薬さんが使っていた懸場帳(かけばちょう）が、販売管理、在庫管理、顧客管理、会計管理の機能を備えた現代でも通用するデータベースツールであることや、売薬というシステムを富山の先人たちが多くの努力と工夫で現在まで守り育ててきたことを学び、郷土の歴史について理解を深めることができた。

中川　知之（富・堀川中）

南砺市中教研社会部会・活動報告

南砺市中教研では､５月の研究授業での協議と、各学校での実践をもちよりながら地理的分野の単元構想を考えるグループワークを行った。

研究授業では、井波中学校の前田将司教諭が、２年地理的分野の日本の地域的特色の単元において「日本の人口の変化によって、今後生じる課題は何だろう」という学習課題で授業を行った。この単元は多くの小単元に分かれており、小単元や授業ごとのつながりや振り返りを活用し、どのように単元のねらいに迫るかを意識した実践であった。

部会協議では、生徒への本時や単元全体の課題の意識付けの方法や、次時への見通しや予想をもたせる活動をすることで、小単元のつながりを意識して指導できることなどについて協議した。

福山暁雄指導主事（西部教育事務所）からは、協働的な学びを実現するためのICTの効果的な活用方法や、複数の資料の比較・関連付けの仕方について、指導助言をいただいた。

グループワークでは、研究主題の解明のためには、１時間の授業だけでなく単元全体や単元同士のつながりをデザインする重要性が増しているとの認識の下、３グループに分かれ、各自の実践を基にしながら単元構想図を作成する活動を行った。日本の諸地域の近畿地方、関東地方、東北地方の各単元において、視点（環境保全、人口、生活文化）を設定し、単元を貫く問いや各時間の問いや学習活動、ICTの活用場面、各時間や単元の評価規準、単元の評価方法について協議をし、１枚の構想図にまとめた。ねらいを意識した学習課題の設定の仕方や、ICTの効果的な活用場面について、部会員同士で協議や意見交換を行うことで多くの気付きが得られ、これからの各校での実践に生かせるものとなった。

今後も、部会間での情報交換を活発にし、よりよい実践につなげていきたい。

本田　祐樹（南・城端中）